

第3回「日中未来創発ワークショップin北京～未来の都市生活を考える」 企画運営スタッフレポート

東京大学教養学部
豊嶋駿介

都市とは自然から切り出された人工的な環境だ。その内部では人々の生活と政治が密接に結びついている。都市に存在するものはすべて人為的・政治的なものだが、私たちは普段の生活でその事実気づかないまま暮らしている。異国への旅は故郷と異邦の相違を感じさせるが、都市の政治性を認識するには十分でない。都市の政治性は巧妙に隠されているから、普段とは異なる視点からの問いかけによって暴露される必要がある。そしてこうした問いかけは、異邦の人との交わりの中でもっともよく生じるものでもある。

私たちは今回のプログラムを通じて、日中の大学生・社会人に対してワークショップを開催した。北京でのフィールドワーク、AI企業であるセンスタイムへの訪問を通して、「X年後の未来の若者の生活シーンを考える」というテーマで都市の未来について考えるものだ。主眼にあったのは「都市の未来」について、北京という異邦、AIという先進技術の観点から問いかけることだったといえるだろう。

問うことは単純に疑問文を提示することではない。問うことは、問う対象に対して何かしらの姿勢をとり、そこに隠されたものを暴こうとする営みだ。もちろん、問われる対象が素直に自らを開示してくれるとは限らず、ときに逆襲を受ける可能性があることも覚悟しておかなくてはならない。

ワークショップの中で私たちはまず「未来」に問いを投げた。日本での生活や北京での散策を通じて見えた現在の都市に対して、その未来を考えることは過去と未来に対してそれぞれ向き合うことを意味する。過去に向き合うとは、その都市がなぜそのような作られてきたのかという背景に対する洞察や、過去が積み上げてきた負債を現役世代が受け止めなければならないという信念を持つことだ。そして未来に向き合うとは、私たちが想像する未来に対して、その実現の責務を私たちが負うことである。ワークショップの講評では「このワークショップは市長やそういった立場の人こそ参加するべきものだ」という趣旨の話もあったが、未来への問いかけはこういった責任を私たちだけでなく、政治にかかわるあらゆる人に対して喚起するものでもあったのだろう。

続いて、私たちの問いかけは「都市」に移る。都市は政治と密接に結びつき、政治の構想する都市が技術によって実現される。北京では道路やその他空間が日本とは比べ物にならないほど広いため、信号などがそれほどなくても交通が機能し、乗り捨て前提のレンタルサイクルも日本よりはるか安い金額で提供される様子が見られた。また、QRコードでの決済が完全に普及し、スマホ一つであらゆるものの購入・決済が可能となっている。技術はこのように都市に浸透していく。日本でも同様のことは起きてはいるものの、そのスピードは中国に比べはるかに劣るといってもよいだろう。

日本と中国の間の明白な技術の違いは、センスタイム・百度といった中国を代表するAI企業の訪問中にも強く感じられた。日本では医療や製造業のDXといった事業に対するAIの導入に対して、スタートアップなどの中小規模のプレイヤーが多い。一方、Googleと同様の検索エンジン・プラットフォームを提供する百度などでは、上述した事業を大企業がひとまとめにおこな

っているだけでなく、そこへの投資額も日本とは比較にならない額となっている。日本ではカルテなどの医療情報が分散的に集められ、まず情報を集約する段階で大きな障害があるのに対し、中国ではそうした情報がすでに集約され利用しやすい土壌がすでに整っている。また、救急車などの公的サービスと連携した事業が成立しやすい点も日本とは異なっているだろう。

こうした中国の技術的・政治的発展は、とりわけ都市における技術の浸透という点において日本をはるかにしのいでいる。私たちは今回のワークショップで数多くの問題を見出し、それに対する未来像を構想した。フードロスの可視化・環境への影響の測定技術など、現在の問題に対していくつか理想的な未来像を描いた。もしこうした未来像が実現されるとしたら、中国は日本よりも数年あるいは数十年早いスピードで実現していくだろう。このとき、私たちはまた新たな問の前に立つこととなる。つまり、「日中の違いをどうとらえるべきなのか?」という問だ。

紙幅の都合、安直な回答にはなるが、問題は価値の多元化をどれだけ受け入れられるかにかかっている。つまり、一つの問題に対して様々な解決の在り方を許容することによって、単純な「技術発展の速さ」「政治の効能」といった観点にこだわらない未来を実現できるのである。フードロス一つとっても、AIによって情報を集約し可視化してもよいし、日本のように山間地が多く居住地が狭くなるのであれば、一つ一つの地域コミュニティが独立してフードロスを解消する仕組みであってもよく、そこに優劣はないのである。

今回のワークショップという空間は、まさにこの価値の多元化の縮図だった。もともと

「工房」を意味するこの単語は20世紀以後教育の文脈に吸収され、様々な人にとっての学習の場としての意味を帯びた。そこで要求されるのは一つの答えを導き出す強いリーダーシップではなく、それぞれの人が様々な解を導き出せるような場を作り出すことだ。冒頭にも述べたように、都市とは政治と密接に結びついた空間であり、それについて議論することは一見楽しげでもその奥深くには政治的な緊張が伴う。だが、今回のワークショップでは、そうした緊張を乗り越えた自由の空気の中で、都市の未来について語り合う場を創りあげることができたと思う。こうした経験を糧に、今後も日中関係に限らない様々な場所で邁進していきたい。

最後に、笹川平和財団をはじめとするプログラムに携わっていただいた方々に、今回の貴重な機会について御礼申し上げ、結びとさせていただきます。